

## なぜ今 学校給食の無料化が広がるのか

竹下 登志成(自治体問題研究所常務理事)

### はじめに

ご紹介をいただきました竹下です。団塊の世代で今年 68 歳になります。学校給食法が制定された翌年、昭和 30 年に小学校に入学して、確か昭和 32 年から学校給食を食べて育ちました。人口が爆発的に増えた時代、学校給食も段々と普及していくという過程だったと思います。私の娘 2 人も私と同じ小学校だったので同じ給食で育ったのですが、今年 1 年生になった孫は、保育所の友達が多く行っているという隣の小学校に入ってしまうまで、残念ながら親子 3 代で同じ給食を食べるという夢は実現しませんでした。

食事がそうですが、学校給食というのは、皆さんが今ひしひしと感じていらっしゃる人々の貧困とか格差が具体的に表れているという意味もあるし、またいまでも注目を浴びる行政サービスです。そんなことを含めて、今日はお話をさせていただきます。

最近、中学校給食を実施するかどうか政策の争点になっている市があります。皆さんはご存知ないかもしれませんが、大都市では中学校給食をやっていない市がありまして、とりわけ神奈川県の実施率がひどくて(学校数で  $27 \cdot 1\% = 2016$  年 5 月)、いちばん頑強に「愛情弁当論」を振りまいているのが林文子・横浜市長です。しかし周りの大都市がだんだん中学校給食の実施を言い出し始めて、川崎市が市長選挙の中で公約をして、昨年の暮れからスタートさせています。先週「神奈川新聞」の取材を受けましたけれども、間もなく行われる横須賀市の市長選挙でも争点の一つとなっていて、有力な現職の候補者が中学校給食の実現を公約に掲げていますので、間もなくこちらでも実現するだろうと思っています。そういうことで、横浜市の「愛情弁当論」がいつまでもつかなと見えています。また他県でも、中学校給食をこれまでやってこなかった大都市が実施に踏み切るという状況が起きています。

なぜ中学校給食が今政策や選挙の争点に祭りあげられるのか、という話が今日のもう一つの論点です。

### —新自由主義が連れてきた子どもと“食”の問題点

#### ① テレビは「食べもの番組」花盛り—「食」は見るものに？

コンビニやファミレスが増える、スーパーでもお惣菜コーナーが拡充される中で、今食べるという作業も調理という作業も家庭の中から遠のいてきています。しかし逆に、テレビの食べ物番組は大変人気があるのでしょうか、ある日のテレビ欄を調べたら一日で 21 ほどの番組が組まれていました。代表する番組では、栃木県もよく題材になる「秘密のケンミンショー」ですが、ここで取り上げられる食材のほとんどが“油まみれ”の料理であるこ

とが特徴です。栃木でいえば餃子が直ぐに思い浮かびますけれども、他県の名物料理でも油を多量に使った料理がほとんどです。テレビ番組では、多分探偵番組と並んで食べ物番組が人気があるのでしょう。そういう時代になってきているわけです。

しかし、食事をつくることは逆に家庭の中では非常に稀薄になってきています。例えば、家庭の中で出汁のとり方がどのように行われているか、あるいは正月のおせち料理を今どのくらい家庭の中で作っているかを調べた人たちがいます。アンケートでは「出汁を自分で取っている」という人たちは50%を超す。「一度も取ったことがない」という人は9%に過ぎません。しかし、「どうやって出汁を取っていますか」と聞くと、半分以上が「粉末出汁で取っています」と答えています。

一方で、食べ物はますます商品化しています。宮城大学の調査ですが、私たちの口に入る農作物の8割が加工調理されたものになっている、つまり大根だとかニンジンといった素材を買って作るのは想像以上に少数派になっている。私の住む町の通りをはさんだ向こう側に千葉大学という1万人以上の学生・教職員がいる大学があります。そのため私どもの町内にも単身者用のアパートが沢山できているのですが、たまたまそういう若い人達が出した生ごみをカラスが突っついていてのを見ても、野菜の切りくずなどが出てきたことがなくて、ほとんどカップです。コンビニからカップに詰った総菜を買ってきて、お湯をかけたりそのまま食べているという具合に食事が済まされている。こういう人たちが社会の主流を担った時期に、どういう家庭ができてどういう社会ができてくるのかということ私は大変心配をしています。

総務省の家計調査を見ると、2004年にはパンの購入金額がお米のそれを越しました。もちろんパンは製品で買ってきますから高くつきますし、お米は原材料で買ってきますから安いんですけども、それにしてもパンがお米を抜くというのは、和食文化が言われる割には、和食文化の中心的な部分、米飯だとか出汁を取って味噌汁をつくるのが遠のいてきていることが実感としてわかるわけです。

## ② 貧困が私たちの暮らしを襲う—貧困化が連れてきた“安さ”が選択の第一基準

「安価な食品ほど脂肪分とカロリーが高く「貧困が肥満を招く」結果となった一年収別で見ると、600万円以上の世帯に比べ、200万円未満の世帯は果物と肉は男女とも、野菜は男性で摂取量が少なかった」（「朝日」12年12月7日）

もう一つ、それと同じように貧困という問題が私たちの暮らしの中で非常に色濃く現れてきていることです。貧困化が連れてきた“安さ”が選択の第一基準になっているということは、スーパーにいくとお分かりかと思いますが、最近豆腐はランク分けして売っています。私の近くのスーパーでは、一番安いのが一丁28円です。それから170円位の有機大豆を使った豆腐まで何段階にも分けて売られています。これは年収の差でもって豆腐を選ぶ傾向があるということです。経済格差が食事の格差として表れているということです。

年収が600万円以上層と200万円未満層を比べてみると、200万円未満層では栄養不足という現象が既に起きてきているということが「朝日」の記事でも見て取れます。男性の20代・30代は、ほとんど野菜を食べないという傾向がありますが、微量ですが必要な元素もほとんど摂れていません。丸の内のサラリーマンが昼食にいくら使っているかという新生銀行の調査では、平均の昼食代が1992年に746円だったのが、2014年には564円に下がっています。今日は時間があつたので、宇都宮の街を県庁の方に歩いてきますと、あるホテルにランチを食べようかという家族が入っていきましたが、ランチは3000円から5000円というコースでした。その隣に弁当屋がありまして、一番安い弁当がのり弁で390円でした。こういう格差が宇都宮でも隣り合わせに見ることができます。年収の差がはっきりとした食事の差になっているという状況があるわけです。

「肥満は飢えの裏返し。いつも空腹に悩まされていたら、カロリーの高いものを選ぶのは当然」(米国なのに肉の国)「朝日」13年1月6日

「米国なのに肉の国」という「朝日」の記事では、貧しい人々が飢えないように空腹に悩まないようにと考えれば、安くてカロリーの高いもの、肉を選ぶのが自然だという言い方がある黒人の女性がしています。アメリカでは6割の人が肥満だといわれていますが、できるだけ少量でお腹が一杯になりかつ体の中に熱源が蓄えられるものということで、脂肪分の多い物を食べる。だからアメリカの格差とか貧困が、肥満とか脂肪分の取りすぎという形で表れているというのです。

### ③ “母親基準”を維持できなくなった—“良妻賢母”の終えん

最近、“愛情弁当”とか“専業主婦”という言葉が聞かれなくなったと思いませんか？でも、先ほどの林文子・横浜市長は、愛情弁当こそが家庭の絆だみたいなことを今でも言っています。統計では、専業主婦は1975年が最も多くて、それからどんどん減ってきました。1990年代になると急激に減りました。今でも20代の女性にアンケートを取りますと、「専業主婦になりたい」願望は高い比率で出てくるそうですが、それは願望に過ぎなくて、専業主婦になれる確率はとても低くなっています。

並行して少子高齢化という問題が出てきたり、フリーターとか非正規職員、あるいは「できちゃった結婚」という言葉も80年代になってから急に増えたことが山田昌弘さんの『迷走する家族—戦後家族モデルの形成と解体』(有斐閣、2005年12月)に出ています。将来本当に働き続けられるのかどうかということに対する不安感から女性も働かなくてはならない状況が生まれて、専業主婦が愛情弁当をつくるという家庭の形が崩れてきているのです。

### ④ 貧困が“未来不安”をおおる—“一に家族、二に企業、最後に公的なセーフティーネット”が回らなくなった

これまで日本では家庭が子どもを育てる、高齢者の面倒も見るという形で、「一に家族、

二に企業、三にセーフティーネット」、つまり市役所の福祉制度は最後に頼るものだったわけです。それが家族で支えるという力が非常に弱くなった結果、ご承知のように高齢者にも介護保険の制度ができたり、保育所が足りないという問題が出てきたりしてきました。企業もこれまで社宅を持ったりして社員の一生の面倒を看てきたものが、それをしなくなってきているという状況もあって、最後の公的扶助、セーフティーネットに対する期待感が高まっているという状況が、「保育所を作れ」という運動などに顕著に表れています。

## ⑤ 貧困が子どもの栄養を奪う

- ・生活保護以下の収入で暮らす子育て世帯の割合は 13・8%、約 146 万世帯と、1992 年から 20 年間で倍増している。「子どもの貧困はかつて地域特有の問題であったが、現在は全国で普遍的に深刻化している」（「東京新聞」2016 年 3 月 2 日）。
- ・厚生労働省が行った 2011 年国民健康・栄養調査では、年収別にみると、600 万円以上世帯に比べ、200 万円未満世帯では果物と肉が男女とも、野菜は男性で摂取量が少ない事態が明らかに（「朝日新聞」2012 年 12 月 7 日）。

貧困という問題は、生活保護以下の年収で暮らす子育て世帯の割合が 13.8%であるとか、母子世帯が 5 割を超えて貧困家庭であるとかは、みなさん新聞の記事でよくご覧になっていらっしゃると思います。貧困家庭がこの 20 年間で倍増してきているという状況が一方であって、貧しい層の子どもたちの栄養不足や栄養状態という形で、食という問題に如実に反映されてきている。国民健康・栄養調査でそういう状況が明らかになってきているわけです。

## ⑥ 小中学校は「保健の先生」「栄養教諭」の時代から「スクールカウンセラー」の時代へ

学校の中では、「保健の先生」が一つのセーフティーネットでした。ところがその保健の先生だけではどうにも子どもを守れなくなってきていて、子ども達の健康だけではなく、貧困という問題、家庭経済という問題も併せて考えなければならないという時代になってきました。丸ごと子どもを見るという意味で、「スクールカウンセラー」という人たちの仕事がクローズアップされる時代になってきているのです。

## 1. 新自由主義と子ども

### ① 新自由主義というのは企業の力による社会のコントロール、それが教育にも

「現代の教育崩壊の最大の原因は、本来教育に関与すべきではないとされる二つのもの、政治と市場が教育に全面的に関与してきたことの結果」（内田樹『内田樹による内田樹』（140B、2013 年 9 月）

新自由主義と子どもということですが、新自由主義を一言で言いますと、企業の力で社会をコントロールしていこうという意味です。それが教育にも侵入してきているという状況をわかりやすく解説してくれているのが内田樹（たつる）さんです。私より一つ年下で

神戸女学院大学を定年で辞めましたけれども、氏の言う教育はこうです。6歳で小学校に入って義務教育9年間に高校3年間を加えた教育の結果は20歳を超えてから表れる。ところが新自由主義というのは企業の論理ですから、そんなに悠長なことは言っていられない、投資をしたら来月あるいは1年先にはその結果が出なければならないという物の考え方で。だから、教育の物差しと新自由主義の物差しは大きく違うのに、それを促成栽培で早く結論を出せというのは無理がある、というのが内田さんの新自由主義を教育に当てはめるとどういことが起こるかという言い分です。教育崩壊は、新自由主義を教育にも適用したから起きたと言うのです。

## ② 少子化は労働力を限りなく安上りにするところから生まれた

もう一方で、少子化というのは労働力を限りなく安上りにするところから生まれたと言っても言い過ぎではありません。給食の現場でも民間委託がどんどん進行しています。新自由主義によって学校給食を安く仕上げようと考え、設備や食材はあてがいぶちですから、人件費を安くするしかありません。内田さんは「同一労働最低賃金」という言葉で表現していますが、これが一番典型的に表れている例は、大阪市バスの運転手の給料です。何で同じ地域を走っている阪急バスの運転手より賃金が高いのか、だからもっと安くしろという言い分が働いて、大阪市議会は大阪市バスの運転手の賃金を大幅に下げようです。でもこれは、その結果、阪急バスの運転手の賃金の方が少し高くなってしまおうと、今度は阪急バスの賃金を下げるようになる。つまりモグラ叩きのような論理で、同じ労働を最低賃金まで低めるところまで行ってしまうのではないか、それを「同一労働最低賃金」と内田さんは表現しました。

学校給食の民営化でも同じ状況が起こっています。学校給食で10年、20年かけて調理員や栄養士が身につけてくるノウハウがあります。例えば、月曜日のスープの味は金曜日の味よりも濃くするというノウハウがあります。何故かという、土・日、子どもたちは家で市販品など味の濃いものを食べてくる、一方給食は穏やかな味にしているので、月曜日はもの足りないという子どもたちが出てくる。それで、月曜日の味は濃くしておいて、それからだんだん金曜日に向けて味を薄くしていく工夫をしているわけです。これこそプロです。そういうことは民間委託では必要がない。すべてレシピに書かれた通り、機械的にこなす調理員がいさえすればいいのです。最近、“スキル”という言葉をよく聞きますが、調理員や栄養士が時間をかけて身につけたスキルは無視し、機械に合わせて指示通りの給食を作る技量で事足りるという風潮が蔓延しています。

子ども達も、成績競争の中で孤立していくという状況があります。子どもが一人でご飯を食べると、野菜や果物の摂取量が減るという結果が統計的に出てきます。またそういう不健康な食行動になっていくから、みんなで食べることに比べるとうつ病になる傾向が2.72倍に膨れ上がるという調査結果もあります。そうした新自由主義の中で出てくる現象に対しても、私は給食の役割をもっとプラスに評価することが求められていると思います。

## 2. だからこの時期、「子ども食堂」や学校給食に注目が集まるようになった

この時期子ども食堂や学校給食に注目が集まるようになったのは、子どもたちが食事できちんと栄養を確保できなくなってきた状況が誰の目にも明らかになってきているからです。社会が子育てをしないと子どもが育たないという状況が生まれてきています。

日本で唯一「朝ごはん条例」という条例を作った自治体があります(制定は2004年3月)。青森県の鶴田町といってリンゴの名産地です。役場に聞きに行ったんですが、その課長さんは、最近リンゴが食べられなくなってきたことが条例制定までして“朝ごはんを食べよう運動”を始めたきっかけの一つであると言いました。何故かという、リンゴと米で農家を維持してきた町でリンゴが売れなくなり米価が下がった結果、お母さんたちが隣の弘前市とか五所川原市のスーパーに朝早く働きに出るんです。それによって子どもたちの朝ご飯は菓子パン1個テーブルの上に置くか、あるいは無いかという状況になって、子どもたちが朝ご飯を食べない、食べられない状況が生まれているということでした。

### ① 貧困が広がった結果、子どもの栄養確保での学校給食の役割が上がっている

朝ご飯を食べない子どもたちが増え、貧困が広がった結果、子どもの十分な栄養確保のために学校給食に注目が集まっています。学校給食が唯一の栄養源だという子どもさんが結構多いという実情があるからです。

### ② 全国的に学校給食施設が建て替え期に入っている

それから学校給食施設が全国的に建て替えの時期に入ってきていることがあります。衛生基準も変わって厳しくなりました。また、アレルギーを持つお子さんが増えてきているという状況があって、アレルギー対応もしなければならぬという問題、一方では給食施設を建て替えるのであれば、新自由主義に沿ってもっと民間委託を進めるべきだというもののお考え方がどんどん広がってきている状況もあります。

### ③ 中学校給食未実施自治体で実施を目指す大きなうねりが

冒頭申し上げましたが、中学校給食を実施していない大きな自治体では、そこへ引っ越してみたら中学校給食がないことで若いお父さんやお母さんがびっくりするという状況が生まれています。千葉県でいうと、木更津市が最後の抵抗勢力だったんですが、東京湾横断道路ができて15分で川崎まで通えるようになり、都内に通勤できるようになったところです。それなのに中学校給食がなければ若い人達は引っ越してこないに違いないという意見が高まって、ここの市長はとうとう愛情弁当論の熱心な信奉者を切り換えて、中学校給食をやることになった結果、千葉県内で中学校給食が100%実現したという経過があります。中学校給食もそうですが、若いお父さんお母さんはよく見ていまして、保育所がなくて待機児童が一杯という自治体にはなかなか引っ越しません。どういサービスがその自治体にあるのかをみなさん検討して、どの自治体に住むかという選択をしています。

### 3. そこで子どもの「食べる」から考えてみる

(1) 学校給食を軽くみてはいけない — 人の一生に作用するし、一度できたシステムは 20～30 年変わらない

そこで次に子どもの「食べる」というところから考えてみます。市役所の偉い方々は、学校給食というのは昼ご飯をあてがうことだと考えているフシがあります。若いお母さん方でも関心の薄い方々は、「うちの子に昼ご飯を食べさせてくれるだけでいいです」くらいで終わってしまうことも多いんですけれども、実は学校給食というのは、単なる昼食の提供だと思っていただいても困るのです。人の一生に作用します。千葉市は、小学校では各学校に給食室があって給食を作っているのですが、中学校になった途端センター方式で工場で作った給食を運んでくる形をとっています。すると、小学校の時の給食と中学生になったときの給食の質の差というのが歴然とわかるんですね。上の娘は未だに「中学校で出たソフト麺は人を馬鹿にするものだ」と悔しがっています。今年ちょうど 40 歳ですが、中年になったいまでも食べ物のうらみは忘れないものです。

そういうことで、食べるということは人の一生に影響を与えると同時に、一度できたシステムは 20 年、30 年は変わりません。給食工場はそれくらいもつように作られていますから、一度できたシステムは、親子二代、あるいは三代にわたって使われ続けます。ですから、どういうシステムにするかについては、急がずに 1 年でも 2 年でもかけて、市民のみなさんの間で結論を出すべきだと私は考えています。

(2) 何を食べるか、どう食べるかがこんなに求められている時代はない

#### ① 「毎日朝食を食べない」「食べられない」子の増加

小学校高学年 6・5%、中学生 9・5%（「朝ご飯条例」をつくった青森県鶴田町の 07 年度の数字）。「肥満度 20%以上」9・2%。“夏休みが怖い”という給食現場の人たちの声。学校給食が主要な栄養源という子も。

そして何を食べるか、どう食べるかがこんなに求められている時代はないということです。申し上げたように、毎日朝ご飯を食べない、食べられない子ども達も増えてきていますし、給食のない夏休み、子どもたちはどんなものを食べているのか、あるいは食べられていないのか、専門家たちはとても心配しています。

#### ② 世界を肥満にした新自由主義—財政難に苦しむアメリカの中学・高校を例に

昨年「東京新聞」から笑い話を一つしましょう。

『「主食重ね食べ」肥満と関連』（東京新聞 2016 年 9 月 13 日）

という記事です。「主食重ね食べ」って分りますか？ ギョーザとラーメンを一緒に食べるようなものです。大阪人に非常に多いそうですが、うどんとかやくご飯とか、お好み焼

きとご飯とか、穀物を重ねて食べるあれですがこれは太る原因なんだそうです。「主食重ね食べ」を週1回以上やると、肥満が63.9%現れるというのか記事の内容でした。

・グレッグ・クライツァー著『デブの帝国』(邦訳・バジリコ)ービタミンやミネラル、必須脂肪酸など私たちの体に欠かせない栄養を届けてくれるはずの食べ物が、大量の硬化油脂と糖と塩にすりかえられている。……手間がかからず、品質が安定し、賞味期限が長く、保温器の中に1時間放置しても味が変わらないようにするためには、それだけ多くの油脂や砂糖を濃縮して入れなければならない。余分な197キロカロリーの一部は、そこから生まれるのだ。

『デブの帝国』は、アメリカ人が大資本のつくった食料品で「デブ」にさせられた過程を告発した本です。合成甘味料というのは日本人の発明だそうですが、砂糖よりも大幅に安いため、例えば50円で小売されているコーラは缶代が8円、原材料費が2円という計算になるそうです。「バリューセット」というのを聞いたことありませんか？ 要するにコーラやフライドポテトの量が多くなって、それをより安く提供できるようになったわけです。そういう形でアメリカ人はどんどん大きなカップのコーラを飲まされ、大きなカップのフライドポテトを食べさせられるようになりました。

WHOが2000年に発表した報告書では、世界の死因の60%は「伝統的な食生活が脂肪と塩と糖にまみれた食事に置き換わったことに関係している」としています。具体的にいうと、アメリカ人は一般的に1975年には年間1000の清涼飲料水を飲んでいて、現在は350ml缶の清涼飲料水を年間570缶飲んでいるという計算(1990)になるそうです。別の調査でも、1978年には平均的なアメリカの若い少年は1日200mlの清涼飲料水を飲んでいて、現在はその3倍近い量を飲んでいて、1日のカロリーのほぼ10%を清涼飲料水から摂っているそうです。缶1本に含まれる砂糖の量は茶さじ10杯分もの量だそうですが、それが砂糖から安い合成甘味料に入れ替えられたわけで、その結果、アメリカ人が大量の合成甘味料を摂るようになって、「デブの帝国」ができあがったというわけです。

・エリック・シュローサー『おいしいハンバーガーのこわい話』(草思社、2007年5月)  
今日、小学校の43%、中学校の74%、高校の98%に、清涼飲料やキャンディーの自動販売機が、糖分や脂肪分や塩分の多い食べもの売る軽食堂または売店がある。

もう一つ紹介したいのは、アメリカの地方経済が立ちゆかなくなった結果、自治体の財政が苦しくなって、教育費が削られる現象が各地で起きていることです。みなさんが子どもの頃、イナゴを取ってバレーボールなどの体育用具を買ったという経験はありませんか。今アメリカでは、コカ・コーラの自動販売機を学校の中に設置してくれたら、いくらバックペイをしますという形で、多い学校では年間10万ドルのバックペイがあるそうです。財政難によってアメリカの学校にコカ・コーラの自販機が置かれ、そのために子どもたちはより大量のコーラを飲むという関係ができてきている。その結果、子どもの頃からファー



ストフードに慣れ親しんで、あるいは清涼飲料水を大量に飲むという暮らしに慣れてしま  
う状況が生まれてきています。

### (3) 「自己責任」と成果主義が子どもたちを追い詰めいじめにもつながっている

・国立青少年教育振興機構調べ—8月28日発表—米国・中国・韓国の高校生と比べて日本  
の高校生は、「自分はダメな人間だと思うことがある」に「とてもそう思う」「まあそう  
思う」と答えた割合は日本が72・5%と4か国中最も高かった（「朝日」2015年8月29日）。

日本の子どもは、他の先進国と比べても、自分の将来性や自分の暮らし、あるいは自分  
の考え方についてなかなか自信を持ってないという比較の結果をOECDが明らかにしてい  
ます。そこをさらに新自由主義で、より自己責任を強調していくと、一層自信のない子  
どもたちができてきてしまいます。

「自己責任」や「自立」の過度の強調ではなく、相互依存的な人間関係をどうつくる  
か、そうしたものの考え方を子どもたちにどう理解してもらおうか—「『個性を持って』よ  
り『他人の気持ちをわかるようになれ』」（養老孟司）。

養老孟司さんの話を書きましたけれども、「自己責任」や「自立」の過度の強調ではな  
く、相互依存的な人間関係をどうつくるか、そうしたものの考え方を子どもたちにどう理  
解してもらおうかということです。今個性を持つと一生懸命強調する世の中があるけれど  
も、個性よりは他人の気持ち、つまり他人と繋がる感覚を持つということがもっと大事なの  
ではないかと養老さんは言っているわけです。

内田樹さんの本の中にも出てきますが、例えば『疲れすぎて眠れぬ夜のために』の中に、  
自分が人間的な質をもっていれば必ず評価をされるという社会に是非子どもたちをおいて  
あげて欲しい、自分がやったことがちゃんと反応として返ってくるということが実は子  
ども達の自信を深めていくことに繋がっていくんだとあります。子どものテレビ番組、例  
えば「サザエさん」では、かつおが40点以下の成績を取ると必ず父親は怒るんです。何も怒  
る必要はないと思うんですが、成績主義が強調されている印象があります。そういう子  
ども番組の中にも成績主義が色濃く入り込んでいて、気になっています。養老さんのように、  
成績より他人の気持ちが分るようになることの方が今求められている人の資質ではないか  
と私も思います。

給食の役割—自分は、生物としての食料から栄養をもらい、食料生産に携わっている人  
によって生かされているという感触をつくる。人と出会える（「人間として生きられる根  
本的条件としての共在性の保障」）。

学校給食というのは、みんなで同じものを食べることを通して、生物として生きていく、  
あるいは大人になるための栄養というものがどういうもので、こういうものを食べるとち  
ゃんとした大人になれるよということを教えています。それを「食育」と言いますが、そ

の食育が今とても求められていることはこれまで申し上げてきました。ただお腹一杯にすればいいというのではなくて、大人になるための栄養がどういうものなのかを学び、それと合わせて人と繋がっていくことの意味を伝える。それが食育ということだと思います。

#### **(4) 市民の間では、学校給食は保育所と同じ、「暮らす」ことの必須アイテムになった**

この点では、いま政府が唱えている地方創生政策の「若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる」に通じます。私は、若い世代の希望で言えば、保育所の整備と並んで学校給食を充実させる、今の子どもたちが必要とする内容の学校給食を提供することを言いたいと思います。子どもたちにとって(だから子育てをする若い世代にとっても)、学校給食の充実が必須アイテムになってきていると思うんです。それは、中学校給食の実施もそうですが、それだけでなくいま(3)で述べたように、学校給食が子育てする上で、直接・間接に果たせる積極的役割があるからです。

#### **(5) みんなで食事することの意味を考える**

##### **① 食事は人と人のつながりを確認する場**

その学校給食の積極的役割についてです。「みんなで食事することの意味を考える」と書きましたが、「食事は人と人のつながりを確認する場」というのは山極寿一さんが『家族の起源—父性の登場』(東京大学出版会、1994年7月)に書いています。山際さんは猿の研究者です。猿の社会と人間の社会とでどこが違うかという、取ってきたものをみんなに分け与えて食べるという習慣は猿社会にはないそうです。特定の猿にあげるということはありません。家族みんなで分け合って食べるという習慣がない。そういう意味で、集団の中で食べること、「同じ釜の飯を食う」というのはそれを象徴した言葉ですが、そういう社会を作ってきたというのは人間だけだと言っています。人間は、集団で食べることを通して、お互いがつながりあっていることを確認してきた生き物なのです。

##### **② 子どもたちのコミュニケーション能力を高めるためにも一教科とはまた違う学習**

子どもたちのコミュニケーション能力、つまり子どもたちがきちんと自分の考え方を述べたり聞いたりできる能力は、集団の中で自分が大事にされる中でこそ育つと思いますし、もう一つ、生活習慣をきちんと身に付けていく中からこういうコミュニケーション能力が高まったり、学ぶ力も高まるということに繋がっていくのではないかと思います。

弁当というのはどうしてもグループ化できません。それに対して、給食はグループの食べ物、クラスみんなで同じものを食べることに意味があります。老人ホームを見てみるとそのことがよくわかります。高齢者は1人で食べるとしょぼしょぼとほんの少ししか食べないのが、老人ホームで5、6人でみんなで話しながら食べるとたくさん食べられることは、そこで働いている皆さんがよくご存知です。集団で食べる力は、私たちが想像するより大きなものなのでしょう。こうしたことから、私は学校給食が教科とは違う学びの場

であることを申し上げたいのです。

ロバート・パットナムの『孤独なボウリング』という本を紹介します。この本の中に、人間が信頼関係を持って集まる集団が町や村の中、地域にあれば、そこで人間は安心して暮らしていける。何か問題が起こった時にも1人で解決するのではなくて、誰かに相談できる関係が出来るということが書かれています。集団の力を一つの財産として捉えて、それを「ソーシャルキャピタル」と彼は呼んでいるんですが、そういうものの考え方、信頼できる集団に大きな価値があることをみなさんに分かっていただきたいと思ひまして紹介いたしました。

### ③ そこで学校給食の積極的な意味を考える—給食はなぜ教育の一部なのか？

学校給食の意味は学校給食法という法律の中に書いてあります。第一条で「学校給食は教育の一環」であることを強調していて、では何を教えるのかということですが、いまの集団の力の意味について教えるのが一つの大きなポイントではないかと思ひます。次の第二条に「目標」が7項目出てきます。具体的に、子どもたちに何を学んでほしいかが書かれています。これは、昭和29年の最初の法律では4項目だったのが平成21年法では7つに拡大されました。そのうち(4)、(5)、(6)が主に増えた項目です。

- 学校給食法第二条「目標」—(4)食生活が自然の恩恵の上に成り立つものであること  
の理解を深め、生命及び自然を尊重する精神並びに環境の保全に寄与する態度を養うこと。
- (5)食生活が食にかかわる人々の様々な活動に支えられていることについての理解を深め、勤労を重んじる態度を養うこと。
- (6)我が国や各地域の優れた伝統的な食文化についての理解を深めること。

(4)は、自分の周りの社会にまで気を回せるだけの視野を持てる、そういう態度を養うということです。(5)は、給食には働いている人たちが多く関わっているということの理解です。だから最近、進んだところは、農家の人を招いて今日のピーマンはこの農家の人で作ったんだよということを紹介しながら皆で食べるということをしています。(6)は、この栃木で伝統的に食べられてきたものは、栃木の風土や環境、自然に相応しいものであって、それを土地の先祖が1000年、2000年と積み上げてきたこと、そういうことを弃えた上で伝わってきた郷土の食べ物ものを理解して欲しい、食べて欲しいということです。

「日本の食文化、食の伝統を見直し、もう一度取り戻さなければならない時期にきているのでは。その点で、選択制よりは全員の学校給食の必要性が高いと考える」「学校給食の献立を立てて、生きた教材として子どもたちに提供している立場から、子どもたちの郷土愛を育みたいと地元の食材を使った郷土料理を献立に入れたりしている。また、子どもたちに食を選択する力や実践する力を身に付ける教育という視点からは、中学校では全員給食が望ましい」(『南国市における中学校給食の実施及び調理方式について』2013年2月)。

南国市(なんこくし)というのは高知市の隣にある人口4万人の市です。私も何度かおじゃまして、すばらしい給食の内容を本に記してきましたが、ナショナルの電気釜で炊いたご飯を各自の茶碗によそって食べるという家庭的な給食を実践しているところです。その南国市が中学校給食を始めるにあたって、その考え方を示したのが上の文章ですが、伝統的な食文化をもう一度見直して郷土食を積極的に活用していこうという意気込みが語られています。高知平野はピーマンなど野菜の産地で、作り手を招いて一緒に給食を食べるなどの活動をよくやっています。

#### ④ でもおおかたの教育委員会は給食を昼食の提供にとらえ、安上がり競争を繰り広げている

しかし、おおかたの教育委員会は給食を昼食の提供と考えているふしがあります。「ランチの提供」だから、安上がり競争も見られます。例えば49歳までの市長がつくっている「全国青年市長会」という組織がありますが、そこでは給食費をもっと下げてみせるなどと言う市長が登場します。安上がり競争を自分の手柄のように捉えている市長がいるのです。学校給食法を読めば、それが法律の中心テーマではなく、宇都宮市でどんな子どもを育てたいか、どんな視野をもった子どもに育ててほしいか、それをどうやって学校給食の中で実現していくかが一番のテーマであることは歴然としています。それを、「お宅は300円、それならうちは290円」というのであれば、吉野家の牛丼とまったく変わりはありません。

## 4. だからすべての子どもたちに学校給食を無料化に一市民全体で子育てせざるを得ない

### (1) すべての子どもの学校給食費を無料にする運動の広がり

それで今日の本論ですが、学校給食を無料にしようという運動が群馬県を中心に盛んになっています。2014年6月に始まった運動で、私もその運動の最初の立ち上げ会で記念講演をさせていただきました。「学校給食の無料化をめざす会」という組織が旗揚げをし、「学校給食は義務教育に定められた教育の一部なんだから当然無料であっていい」という主張で、運動を広げてきました。その会場の後ろの方で赤ちゃんを負った若い男の方が手をあげて「是非進めてください!」と発言しました。そば屋を経営していて、11人の子どもさんがいて、妻のお腹にもう1人入っていると言っていました(笑)。私の計算でも、子どもさんが3人もいると恐らく年間20万円近い出費になり、給食費も馬鹿にならない額です。私が食べた昭和30年代は1食20円でしたが、それと比べると中身もよくなりましたが、給食費も高くなり家計負担も馬鹿にできない額になりました。

**資料** 公立小学校や中学校の給食費の保護者負担を全額補助して無償にする市町村が少なくとも55あることが分かった(北海道三笠市・栃木県大田原市・群馬県みどり市・滋賀県長浜市・兵庫県相生市ほか29町23村。三笠・長浜は小学校のみ)。うち9割がこの6年間で無償に。また、給食費の一部を補助する市町村が少なくとも362ある(「しんぶん赤旗」2017年1月14日)。

○群馬県では2010年4月からの南牧村に続いて上野村・神流町、そして2014年10月から富岡市が実施、安中市長が公約に掲げて当選。第3子の無料化を含めて県内18市町村が実施。

小中学生全員の無料化 みどり市、渋川市、板倉町、草津町

○嬭恋村(2017年度)小中学校の給食費無料化 4316万7000円、小中学生教材費等の全額補助 1323万1000円、学童保育費 50万円(2000円)補助

村「地方創生は子育て支援に」「村への移住者を増やしたい」

○みどり市(2017年度から無料化 小学校8校2757人、中学校5校1434人 計4191人 幼稚園は対象外 予算2億2709万円) 地方創生総合戦略ワクの中で予算確保 財政局は抵抗勢力だ (人口減に対応する)「まち人しごと」の目玉と位置付けた。大きな場面で出生率を上げてゆこう、転出を防ごう、子育て世代の転入を アレルギー児には補助金 36万2000円

○渋川市(2016年度は給食費の30%を公費負担とし、さらに第3子以降の児童生徒を無料に1億904万円)

(2017年度から全額) 予算3億316万円 3つのセンターと5校が自校

目的「子育て支援の一層の充実を図るため、児童生徒の学校給食費をすべて無料化し、子育て世代の経済的負担を軽減することにより、本市の人口減少対策を推進します」

学校給食費 小学生 年額5万1400円(伊香保地区は5万2600円)

中学生 年額5万9000円(伊香保地区は6万円)

建て替え 2センターの計画を3センターにして、地場産品の採用を 市が認めた低農薬野菜の活用、玉ねぎを使ったシューマイ

そこで最近、群馬県を筆頭に、給食費を無料する自治体が増えています。資料にもあるように、「3人目から無料」という自治体を含めると県内18市町村が今実施しています。ついこの間、群馬県で久しぶりにこの無料化運動を見直してみようということで、無料にしている、みどり市・渋川市の担当課長と嬭恋村の議員さんをお招きしてお話をうかがいました。この時代、言ってみれば合理化をできるだけ推し進めなければならないという時代ですから、行政として新しい行政サービスをゼロから作るというのはたいへん困難です。逆にいうと、首長が世論の動向を見極めて首を縦に振れば話は早いと実感したのですが、給食費を無料にしてほしいという住民の要望がそれほどのパワーをいま持つようになってくることの反映でもあります。

地方創生の中で先ほど、安倍政権の子育て政策に触れましたが、子どもを育てるという点でもっともわかりやすい政策が保育所の充実とか、小中学校で掛かる経費の軽減化、給食の無料化もその一つですが、そういう社会的な流れに沿った政策であるということです。若い世代、子どもを産み育てる可能性のある若い夫婦を呼び込みたいという意味では、学校給食費の無料化は大変分りやすい政策だと思います。

・日本は、子どもの教育における私的(子どもとその家族)な負担の割合が、OECD諸国の中で最高であることもあり、子育ての費用＝教育費と考える人も少なくないであろう。教育費の中では、もちろん、高校や大学といった高等教育の授業料や入学金などが大きいですが、小中学校の段階でも、制服代や教材費、修学旅行費、PTA会費、給食費など細かい出費があり、ばかにならない額である。子ども一人あたりにかかる学校の費用(学校教育費と学校給食費)は、公立の小中学校であっても年間で平均9・7万円、公立の中学校では約16・7万円、公立の高校では約24万円である(文部科学省「平成22年度子どもの学習費調査」)。

・学校教育費・学校外活動費にかかる総額の平均は、公立小中学校で年間30万5807円、公立中学校で45万340円(文科省学習費調査2012年度)

逆に考えてみますと、日本では子どもの教育にものお金がかかるんです。OECD諸国の中でも最高ですが、文部科学省の調査でも学校教育費・学校外活動費にかかる総額の平均は、2012年度で公立小中学校で年間30万5807円、公立中学校で45万340円かかっています。私の学生時代は国立大学の授業料は月1000円、年に1万2000円だったのが、今は年53万円です。年収は3倍になったそうですが、授業料は44倍に上がっています。それが、奨学金を借りる学生が3分の1を占めたり、アルバイトに縛られる生活に追われたりという当世学生事情をつくり出しています。自治体問題研究所の役員の大学の先生の話をお聞きすると、大学を卒業して初任給を貰ってから数年間は学費の借金を返していかなければならないので、手取り18万円程度の給料の中から月2万円、3万円を返していくのが当たり前だと言うのです。学校に掛かるお金が、子どもの時代でも大きな負担を親御さんにかけているばかりか、社会に出てからも日本人を苦しめているということです。

・医療と同様に、すべての子どもに基本的に保障されるべきものとして、「食」がある。日本においては、飢えるほど食に困窮している子どもはほとんどいないと考えられるが、栄養バランスのとれた食事となれば、話はまた別である。規則正しい食事と栄養素の充足は、子どもの成長に欠かせないものである。そのために、保育所や学校での給食は貧困層の子どもにとって非常に貴重である。公立の小中学校においては、ほとんど給食が提供されているものの、中学校・高校においては提供されていない地域もある。学校という場を、貧困層の子どもへの栄養プログラムのもっと活用すべきである。「学校に行けば、お腹いっぱい、おいしいものが食べられる」でいいのである。

・漏給をなくすためには、普遍的制度に変更してしまうことも一案であることは述べておきたい。義務教育自体は普遍的制度であるのだから、その一部に選別的制度が組み込まれているのは制度としては整合的ではない。自治体の財源の問題もあるものの、給食費はもちろん、修学旅行やクラブ活動などは学校生活の一部である。これらが無償化することも(阿部彩『子どもの貧困Ⅱ—解決策を考える』、岩波新書、2014年1月)。

ご覧のように、阿部彩さんが書いた『子どもの貧困Ⅱ』という岩波新書の一部ですが、この中に、学校給食費は無料にしているのではという記述が出てきます。勉強より前に医療と同時に食べることを保障すれば子どもたちは安心して暮らせる、それで規則正しい食事と栄養素をきちんと吸収できることがプログラムとしてもっと学校の中で取り入れられなければならない。「学校に行けばお腹いっぱいおいしいものが食べられる」ということが強調されます。全体にサービスを提供するという意味で、「漏給」(制度の扱いから漏れること)を無くすためには、これを一般的な制度としてしまって全員に適用したらどうかということから、阿部さんは「修学旅行費や給食費は無料にしてはどうだろうか」という提案をしています。

○学校給食法制定の趣旨(文部省、昭和29年9月28日「学校給食法並びに同法施行令等の施行について」)

7 経費の負担等 これらの規定は経費の負担区分を明らかにしたもので、たとえば保護者の経済的負担の現状からみて、地方公共団体、学校法人その他の者が、児童の給食費の一部を補助するような場合を禁止する意図ではない。要するに、これらの規定は小学校等の設置者と保護者の両者の密接な協力により、学校給食がいよいよ円滑に実施され健全な発達をみることを期待されるという立法の根本趣旨に基いて、解釈されるべきである。

これは、昭和29年に学校給食の制度ができた時に、当時の文部省が保護者の負担について柔軟な考え方をしていたという文書です。今、学校給食費は食材費については親の負担、その他の水道光熱費だとか人件費、建物といった設備は設置者である市町村の負担とされています。それを固定的に考えずに、保護者のふところの事情によって公的負担を増やしてもいいではないか、と言っているのです。

この時代は朝鮮戦争が終わった直ぐ後の不景気で、市役所も給料が払えないという時代でした。そうした状況が日本のサラリーマンの多くを覆っているという時代背景があって、文部省も柔軟な考え方を示したのではないのでしょうか。そのことは現代にも当てはまることであって、私も経費の負担という点では、当時の文部省のような考え方に立つ必要があるのではないかと思えてなりません。

## 5、「安上がり」から食育へ

(1) 文部科学省が定めた食育基本計画(06年3月)は人と人とのつながりを再認識。時代はそう変わっているのに、各市町村教育委員会は「85年合理化通知」をさらにエスカレート？

「安上がり」から食育へという問題ですが、文部科学省は1985年に「合理化通知」というのをを出してしまっていて、給食の提供についてはできるだけ安上がりに、仕事も民間に任せて人件費をもっと削れと全国の自治体に通知しました。この「合理化通知」はその後数十年にわたって独り歩きをしまして、市町村が「もっと安上がりにすべきだ」という言い分

の論拠に使われてきました。

しかし、2006年に出した食育基本計画は、「もっと安上がりに提供する」ということよりも、「このままでは子どもたちがまともに育たないのではないか」という危惧のほうに重点が移ってきます。

「また、望ましい食生活や食料の生産等に対する子どもの関心と理解を深めるとともに、地産地消を進めていくため、生産者団体等と連携し、学校給食における地場産物の活用の推進や米飯給食の一層の普及・定着を図りつつ、地域の生産者や生産に関する情報を子どもに伝達する取組を促進するほか、**単独調理方式による教育上の効果等についての周知・普及を図る**」。←文部科学省答弁「1985年の合理化通知はセンター化の拡大を目的にしていない」。

こんな文章が文部科学省から出されます。単独調理方式というのは自校調理方式ともいますが、各学校に給食室を設けて、給食を作っている人たちの姿を直接見せ、子どもに対して食育の実を上げるというものの考え方です。冷凍食品を使ってベルトコンベアーで工場で大量に給食をつくって、それを各学校にトラックで配送するセンター方式よりもお金と人手がかかる教育の方法について、それをもう一度考え直してもいいのではないかと言い出したのです。

## (2) こんな考え方に立てないか！

その意味で、学校給食を今の時代に合せて充実させる、その充実させる方法・中身についてはもっと親御さんの意見を聞いて考えてもいいのではと考えていましたら、岡山県の倉敷市にそういう文章が出てきました。倉敷市21世紀学校給食検討委員会が2000年12月に「子どもたちの健やかな成長と健康づくりのために」という答申をしています。それがとても素晴らしいので紹介したいと思います。

「各学校の健康問題に合せた食指導を推進していくには、各学校の独自性が大事だ。その独自性を活かした給食を提供しようとするれば、それぞれの学校の実情に応じて給食室を設置し、そこで給食をつくって食育を進めることが求められている」という趣旨ですね。コスト削減を第一に考えるのではなくて、安全性だとか食育という問題の充実をまず念頭において、それでどういう方式が一番適当なのかということをも是非市民の皆さんで考えて欲しいという内容でした。

残念ながらこの答申はお蔵入りをさせられたようで、去年倉敷市で講演をしましたら、今の市長は合理化に傾いていて、一万数千食の大工場を作る方針だということでした。この17年前の答申が忘れ去られるのは、とても残念に思います。こういう、学校給食のあるべき姿を紹介し、市民にそれに沿ったわが市の方向を考えさせるやり方は全国的にもっと伝えられていいと思います。

これからの学校給食でヒントとなる文章は各地で見つかります。北海道の帯広市は玉ね



ぎと豆の産地です。その食料産地に相応しい給食を提供しようとするならば、民間委託が進められている他の一般的な業務と学校給食は違っていて、もっと豊かな内容を考えてもいいのではないかとこの答申を出しています。

★松浦・前高崎市長(37万5000人)「私の自慢は学校給食」「効率至上主義、偏差値中心の教育の結果、学級崩壊、少年犯罪の激増となったのではないかと。自校方式は、金はかかるかもしれないが、豊かな食事によって、豊かな心、人格が形成されるのでは。21世紀を担う子ども達の人格形成のためならば、教育費の増加は未来に対する効率的な投資と言えると思う。他の市町村の教育予算は、7~8%のところが多いけれど、高崎市は10%を超えています。でも、無駄とかもったいないとか考えていません」(高崎市の給食 平成22年度版)

それから、必ず紹介をしている松浦さんというもうお辞めになりましたけれども、群馬県高崎市の市長だった方です。パン屋の社長さんで学校給食の検討委員をやってから市長になった方で、それだけ学校給食への思い入れが強い市長でした。この方が進めたのが全校自校調理方式です。私が話を聞いた当時で小中学校・養護学校が55校だったと思いますが、それから市町村合併で榛名山の山の上まで高崎市になった時、市に編入された学校も1年に2校ずつ給食室を整備して自校方式に改めてきました。今でもやっているはずですよ。

学校給食を指導する栄養士は普通、県の職員として派遣されてくるのが一般的で、狭い給食室に市で雇った調理員さんと県の栄養士さんが入っているわけですから、例えばボーナスの支給率と支給日が違います。それで給料の話はしないことにしているとか、なかなか気をつかうことがあるそうです。高崎市では、県の栄養士さんは学校数の半分に満たない数しか派遣されてきませんので、その足りない分について市費で栄養士を雇って55人の全校配置を実現させているのですが、その栄養士さんたちが月に一度会議を開いてメニューの開発や食育の工夫について話し合っています。この自信が、高崎市の学校給食の水準を維持していると私は考えています。高崎では農協の売店に行きますと、給食用のケチャップとかソース、醤油なんかも一年寝かした給食用を販売しています。そういう関係を作って、地場産品が農協を通じて給食に提供されるという両者の関係を作っているのです。

### おわりに—最初の学校給食の精神は、「子どもは市民がみんなで育てる」

明治22年10月、各寺の住職が中心となって山形県鶴岡市に貧窮者のための小学校、西田川郡鶴岡各宗私立忠愛尋常小学校を設立した。校舎は浄土宗大督寺におき、教育に必要な物品を給与しただけでなく、毎日学校で67名の児童に昼食を与えた。給食は明治22年から昭和22年まで続けられたが、その費用を捻出するため、各寺住職協同による“団体行乞”を行った。「おにぎり給食は、本人に知られないように、卑屈にならないように、差別されないように、いじめられないように大変な配慮がされた。……仏教者がその宗派の違いを越えて協同し、どんなに困難があっても、子どもの食と健康を守るために努力を続けた。この歴史に多くを学ぶべきである」(『浄土宗山形教区史』)。

話のおわりで、私は必ず日本で最初に学校給食を始めた山形県鶴岡市の話をしてきました。鶴岡市は有名な作家、藤沢周平さんの故郷です。鶴岡駅から歩いて15分くらいのところに大督寺というお寺がありまして、その山門を潜った左側のところに「学校給食発祥の地」という石碑が建っています。このお寺で、学校給食が最初に始まったのが明治22年10月です。貧しい子どもたちに教育の機会を与えようと、このお寺の境内にお坊さんたちが小学校をつくるのですが、半分くらいの子どもたちがお昼ご飯を持ってこれないんです。それで、その子どもたちに握り飯くらいは出してやろうということで、お坊さんたちが毎日市内を托鉢して歩いて、つまり市民からカンパを集めて学校給食を始めるのですが、その取り組みは昭和22年まで、つまりいまの学校制度に代わるまで続けられました。

それはどういうことかという、私は子どもというのは市民全体の財産である、子どもがいる家もない家も共通した財産なんだというものの考え方があったと私は思うのです。そこがこの取り組みの一番素晴らしいことではなかったかと。そういう意味で学校給食は、市民みんなで子育てをしていく具体的な表れだと思っていただけないでしょうか。みなさんはどうお考えになるでしょうか？